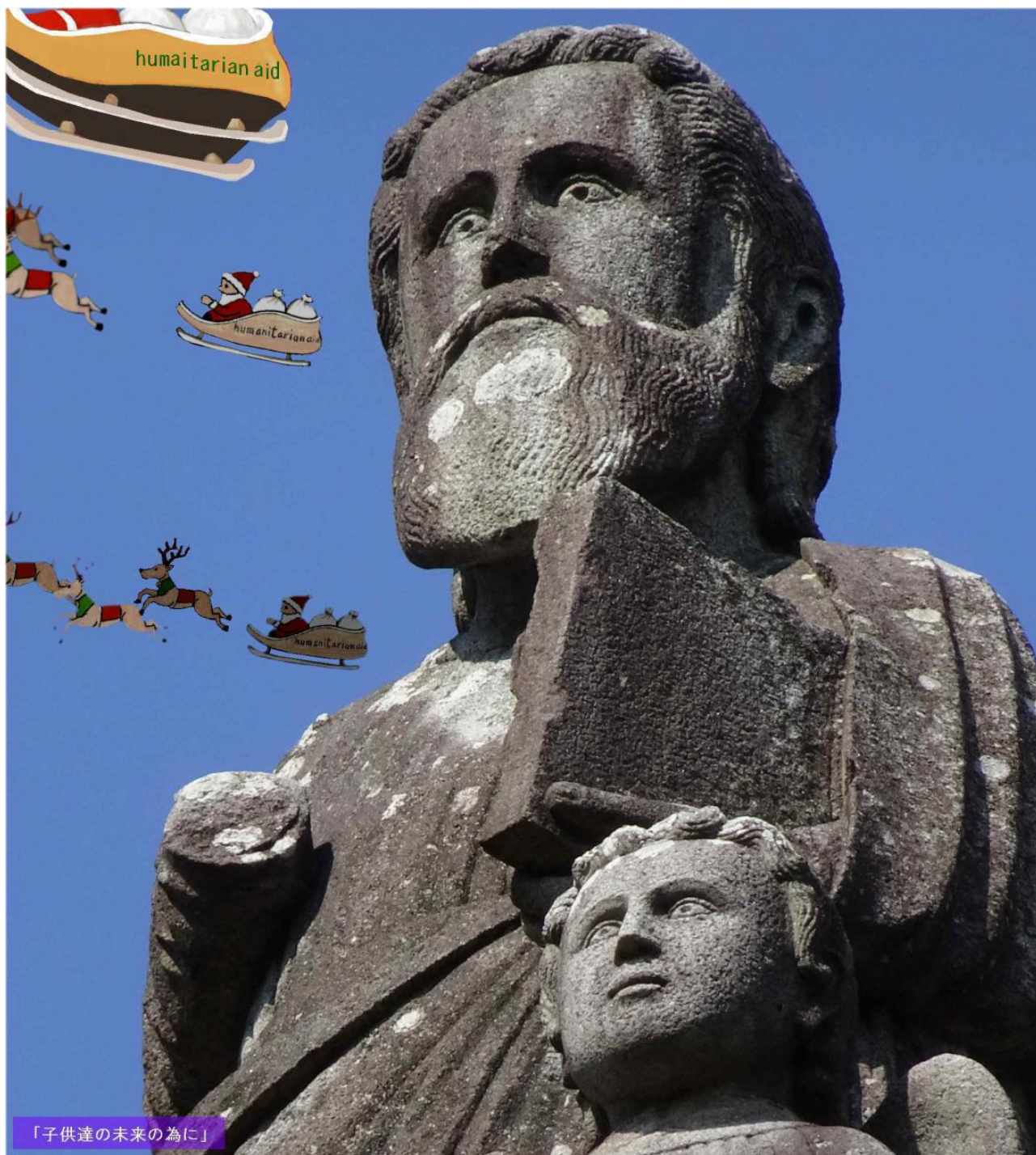


月刊
JMITU

三石工



「子供達の未来のために」

12月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガグループ分会 2023年発行

No.468

JMITUとは

どんな労働組合？

JMITUは

どんな労働組合？

日本金属製造情報通信労働組合は、金属機械、電機、鉄鋼、自動車などの金属製造と通信、コンピュータ、ソフトなど情報通信関連産業で働く仲間を中心に構成されている全国組織の労働組合です。日本IBMやNTTグループなどの大企業から中小企業まで全国約200の職場に組合があります。

労働者・国民の利益をなによりも大切にするナショナルセンター全国労働組合総連合（全労連）の一員として、働く者の雇用と権利を守るため

に活動しています。

ひとりでも入れる

労働組合

JMITUは、個人で加入できる労働組合です。職場にJMITUの支部・分会がなくても、パート、臨時社員や派遣社員など正社員でなくても、誰でも、ひとりから入れます。

「パワーハラをやめてほしい」「残業代を払ってほしい」「会社の将来が心配」などの不満・不安をJMITUに加入し、いっしょに解決しましょう。

労働者の立場にたって、

働く者の権利を守って、

JMITUは、組合員や職

場の声を大切にします。働く者の権利を守る立場をつらぬき、会社の言いなりの組合、いわゆる会社派組合ではありません。一方的な会社のやり方を許さず、働く者の権利を守ってたたかってきた、多くの実績があります。

くらしも会社も

良くする労働組合

会社経営が正常に行われなければ、労働者のくらしをまもることはできません、JMITUは労働者のくらしをまもると同時に、会社との対等な関係を土台に、企業の状況を分析して問題点を明らかにし、どのように改善していくか提言する取り組みを行っています。資材の調達難や物価高騰など、業界全体におよぶ問題には、

経済産業省をはじめとした政府省庁との交渉や国会への請願行動を行い、労働者の生の声を届けることに取り組んでいます。

JMITU綱領 (一部抜粋)

一、わたしたちは、職場を基礎に組織の団結を固め、金属・製造、情報通信関連労働者の労働条件と社会的地位の向上のためにたたかいます。
一、わたしたちは、金属・製造、情報通信関連労働者の団結と連帯の精神にもとづき、資本からの独立、政党からの独立、一致する要求での統一行動という労働組合の原則にたって、労働組合運動の前進と統一をはかります。

掌編小説

ダイジョウブ

仙洞田一彦

鉄筋コンクリートの建物が、ぱっくり割れている。そこに大人たちが集まって、素手でコンクリートの破片を取り除いている。おそらくその破片の下に人間が埋まっているのだろう。五、六歳の子どもが涙を流して叫んでいる。親を失ったか、兄弟を失ったか、家を失ったか。

ウクライナで、ガザでの出来事を、テレビニュースが毎日のように放映している。こういう場面に慣れっこになって、何も感じなくなっている。けないと思いがら見ている。米軍の偉い人が、中国の強引な戦略を批判している。強

い方が、下に見ているものへ「手を出すな」と言っているようにも聞こえる。ウクライナやガザのように遠くの話ではない。中国は日本の隣り。強引と強引がぶつかれば、どうなるか。戦争が始まる。こちらにもコンクリートの破片が飛んできそうさ。

同じニュースの時間、「規則正しく」「心静かに」「穏やかに」誕生日を迎えた人のことも報道していた。

今年ももうすぐ終わる。地球は沸騰している。温暖化で、地球上、干ばつもあれば、大洪水もある。

五郎はテレビを見ながら思っていた。規則正しく、心静かに、穏やかに新年を迎えるには、すべてを見て見ないふりをする事だ。とはいって

もなあ、我が身を振り返れば、何時職を失うか分からない不安定な身分だった。

五郎は長男だった。長男だったら、常識的には一郎だが、父親が四郎だった。その長男だから五郎。分かったような、分からないような。そういう名前を付けた親の性格も分かったような、分からないような。父は四男だった。

五郎の曾祖父は戦争に行ったらしい。曾祖父はとつくに亡くなっている。祖父は生きているが、離れたところに住んでいる。五郎の父からは「祖父」にあたるが、父は祖父の事はあまり知らないようだ。五郎が柄にもなく歴史、日本の戦争に目が向いたのは、やはり、ウクライナやガザの出来事だろう。「戦争」という言

葉が身近になった。もしかするとウクライナやガザのせいだけではないかもしれない。トマホークを買うとか、買わないとか、真剣にテレビを見ていなくても、五郎本人が意識しなくても、耳に入った言葉を、脳はきちんと刷り込んでいる。それを行動に反映させようと意識しなくても、体は脳の持ち主の意図に関わらず反映させる。

一九四五年（昭和二十年）に戦争が終わったのは記憶にある。早く言えば、それ以外の事は覚えていないのだ。学校の勉強は、そこそこまじめにやったが、社会に出て、昔の戦争のことなど思い出すこともなく過ぎてしまった。卒業後何年も経っていないのに記憶のどこかに埋め込まれて

しまっていた。

先月、五郎は祖父に電話して、ひい爺ちゃんの戦争を教えてくださいと頼んだ。

「ひい爺ちゃんの戦争」

電話の向こうで祖父が聞き返した。コロナもあって行き来が途絶え、ほとんど話したことがないので、話があつちに行ったり、こっちに来たりしたけど、分かってくれたようだ。

その話では、一九三九年（昭和十四年）、ひい爺ちゃんは二十三歳で召集され中国に行った。それからいろいろな作戦に参加して、翌年九月に帰ってきた。

それから三年後の一九四二年（昭和十七年）、また召集されて中国に行った。戦地で結核になって帰されて、翌年五

月に召集解除となっている。

一九四五年（昭和二十年）の六月にも召集されているけど、行ったのは静岡県で、二カ月後には終戦。敗戦だ。

ひい爺ちゃんの兄さんと弟が戦死。ひいばあちゃんは兄さんが戦死。

後からもっと詳しく書いた手紙が届いた。それには二度目の召集までの間にひい爺ちゃんが結婚したこと、一九四五年（昭和二十年）になつて空襲が激しくなり疎開したことが書いてあった。

今日は土曜日で五郎の会社は休み。父と母は仕事や用事でいない。エアコン入れて、ソファに座って、さらに小さい電気ストーブを自分の方にむけてぼうつとしていた。慌てて立ち上がると自分の

部屋に行き、机の上に置きっ

放しになっていた祖父の手紙を取って、ソファに戻り深く腰掛けた。中の手紙を取り出して読んだ。

「ひい爺ちゃん、戦争に行つたのは、俺の年じゃん」

声に出して、五郎は思わず背筋を伸ばした。謎解きでも何でも無い。手紙に年齢が書いてあるのだから。しいて言えば、今頃気付いたのかということだ。

ひい爺ちゃんが戦死していたら祖父も、父も俺もいなかった。そんなこと言っても仕方ないが言ってみた。思っても仕方がないが思ってみた。思ってみると、命をつないで生きてこられたしあわせていうのを感じた。

ソファの上に転がしてあつ

たスマホが鳴った。

「お、お、お。ダイジョウブ」
五郎の友達からの呼び出しだ。遊びの誘いだ。何がダイジョウブなのか分からない。ダウンを着込むと、スマホをポケットに突っ込み家を出た。母親が帰ってくれば大掃除を頼まれるかもしれない。逃げ出すにしくはない。

四郎の長男に五郎とつけた血筋を引いているのが、理由になるかどうか。寒いけど風もなく、良く晴れわたった住宅街を、鼻歌交じりで、五郎は自転車を飛ばして行く。